

2023 年度第 3 四半期 決算報告

説明要旨

2024 年 1 月 31 日

ゼオングループを代表して、2024 年 1 月 1 日発生いたしました「令和 6 年能登半島地震」において亡くなられた方々のご冥福を謹んでお祈りするとともに、災害に遭われた方々や関係者の皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

一日も早い復旧、復興をお祈りいたしますとともに、当グループも微力ではございますが、事業活動を通じ復興に貢献して参る所存です。

当グループにおきましては、従業員全員が無事でしたが、自宅家屋等に被害を受けた社員もおりますため、継続的に支援を実施してまいります。

北陸地域の各事業所につきましては、従業員の健康と安全を第一に、順次操業再開を進めております。

ご対応およびご協力いただいております皆様に、改めて深く御礼申し上げますとともに、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

当グループの製品を全世界のお客様に安定的にご提供していくことが、被災地のご支援につながり、ひいてはステークホルダーの皆様のご期待に応える道であると信じております。

【説明会資料】

<https://www.zeon.co.jp/ir/financial/bs/pdf/240131.pdf>

【説明内容】（取締役常務執行役員 曾根 芳之）

p. 3 2023 年度 Q3（第 3 四半期）総括とセグメントの概況

総括：Q3 連結実績は、対前年同期で増収減益、対前期で増収増益。Q1-Q3 連結実績は、市況低調の影響を受け対前年同期で減収減益。能登半島地震の影響および直近の状況を精査し、業績予想を下方修正した。

エラストマー素材の概況：合成ゴムの出荷は総じて堅調に推移し、QoQ は増収増益。手袋向けラテックスおよび粘接着剤市場向け化成品の不調が響き、YoY は減収減益

高機能材料の概況：高機能樹脂は、出荷量増により QoQ は増収増益、光学フィルムの新生産ライン稼働開始に伴う原価増で、YoY は増収減益。高機能ケミカルは、電池材料の出荷量増により QoQ は増収増益、化学品の需給バランス緩和の影響を受け、YoY は増収減益。

p. 4 2023 年度 Q3 の事業環境（為替・主原料推移）

左手グラフのとおり、為替は米ドル・ユーロともに対前年同期、対前期ともに、円安に推移。

右手グラフは主原料価格の推移であり、国産ナフサ、アジアブタジエンはいずれも上昇した。

p. 6 2023 年度 Q3 業績サマリー（全体）

四半期の業績は、売上高 984 億円、営業利益 65 億円となり、対前期で 48 億円の増収、32 億円の増益となった。

第 1 四半期から第 3 四半期の累計は、売上高 2,838 億円、営業利益 160 億円と、対前年同期で 104 億円の減収、118 億円の減益となった。

p. 7 2023 年度 Q3 業績サマリー (セグメント別)

四半期売上高は、エラストマー素材が 550 億円と、対前年同期で 10 億円の減収、対前期で 24 億円の増収、高機能材料が 277 億円と、対前年同期で 27 億円の増収、対前期で 15 億円の増収となった。

四半期営業利益は、エラストマー素材が 25 億円、高機能材料が 36 億円と、両セグメントともに対前年同期で減益、対前期で増益となった。

p. 9 エラストマー素材 概況

エラストマー素材の売上高は、QoQ でいずれの事業も増加したが、YoY は手袋向けラテックスおよび粘着剤市場向け化成品の不調が響き、減少。なお、合成ゴムの出荷は総じて堅調。

p. 10 エラストマー素材 P/L

表の出荷量は、22 年度第 3 四半期の出荷量を 100 とした指数でお示ししている。

手袋向けラテックスは流通在庫が依然として余剰で出荷量は低調、化成品は QoQ、YoY とともに出荷量は増えるも、粘着剤市場そのものに力強さはなく、市況は振るわない状況。

エラストマー素材事業の営業利益は、化成品の原価上昇分を価格に転嫁できず、YoY は減益となったが、QoQ は合成ゴムが底上げし増益となった。

p. 11 エラストマー素材事業：要因別 営業利益差異 (QoQ)

数量差は、出荷量の増加により、5 億円の良化。価格差は販売価格の下落により 10 億円の悪化、為替差は円安影響で 10 億円の良化、原価差は原料価格下落の影響で 9 億円の良化。販管費差は横ばいとなり、以上の合計で、営業利益は 13 億円の良化。

p. 12 エラストマー素材事業：要因別 営業利益差異 (YoY)

化成品を中心に出荷量が減少し、数量差は 8 億円の悪化となった。また、化成品の価格政策および合成ゴムの原料価格下落に応じた販売価格の下落により、価格差は 125 億円悪化した。為替差は 29 億円の良化、原価差は、原料価格影響で 30 億強の変動費良化、固定費悪化により 40 億弱悪化の合計で 2 億円の悪化に対し、棚卸資産関連費用は 13 億円の良化、合計で 10 億円の良化となった。販管費差は海上運賃軟化等により、33 億円良化した。以上の合計で、営業利益は 60 億円の悪化。

p. 14 高機能材料 P/L

高機能樹脂は、光学樹脂、光学フィルムともに出荷量が増加し、対前期は増収増益となった。また、対前年同期は出荷量に応じて増収となるも、9 月に稼働を開始した大型フィルム新生産ラインの減価償却費が 3 か月分満額発生したこと、および歩留まり改善に取り組むも時間を要していることで、変動費および固定費が増加し、減益となった。

高機能ケミカルは、電池材料の出荷量増により対前期は増収増益となった。また、対前年同期は出荷量に応じて増収となったが、化学品のうち香料や半導体市場において需給バランスが緩和したことで、出荷や市況価格が低下し、減益となった。

p. 15 高機能材料事業：要因別 営業利益差異 (QoQ)

数量差は、医療その他向け光学樹脂や EV 向け電池材料の出荷量増により、15 億円の良化となった。価格差は、化学品の販売価格下落の影響を中心に 6 億円の悪化、為替差は円安により 4 億円の良化、原価差は光学フィルムの新生産ラインの稼働開始に伴う原価増により 11 億円の悪化となった。販管費差は、光学フィルムの強い需要にお応えするため、試作を延期し製品の生産を優先させたことで、8 億円の良化となったが、現時点でこれによる中期経営計画への影響ないものと見込んでいる。以上より、営業利益は合計で 10 億円の良化。

p. 16 高機能材料事業：要因別 営業利益差異 (YoY)

数量差は光学用途向け光学樹脂や電池材料の品目構成差の影響を受け、29 億円の悪化となった。価格差は光学樹脂、化学品の販売価格改定により 20 億円の良化、為替差は円安影響で 12 億円の良化。原価差は、光学フィルムの新生産ラインの稼働開始に伴う原価増、エネルギー費用および定修費用高騰の影響で 42 億円の悪化、販管費差は新規開発費用および間接部門費用配賦増により 24 億円の悪化となった。以上より、営業利益は合計で 63 億円の悪化。

p. 17 高機能ケミカル事業：電池材料の状況（出荷量）

EV 向けは、中国春節に向けた出荷前倒しや、お客様の稼働回復に伴い、対前年同期 120%、対前期で 115% となった。民生他向けは、モバイル端末向けで緩やかに回復しつつあるが、力強さはなく、対前年同期で 60%、対前期で 79%となった。

p. 18 高機能樹脂事業：光学樹脂の状況（出荷量）

光学用途向けは、スマホ向け、セキュリティカメラ向けで復調の兆しが見えるも、出荷の端境期となり、対前年同期で 93%、対前期で 92%。

医療その他向けは、在庫調整が続く顧客もある一方で、一部顧客の需要増により、対前年同期で 133%、対前期でも 133%となった。

p. 19 高機能樹脂事業：光学フィルムの状況（出荷量）

中小型向けは、タブレットおよびノート PC の市場は低調が続いていますが、スマートフォン生産開始遅れの影響でスマホ向けの出荷は落ちず、さらにタブレットの時期モデルの生産開始により、対前年同期 112%、対前期 120%となった。

大型向けはディスプレイ市場に緩みが見えるも、COP フィルムの需要は堅調であり、対前年同期で 193%、対前期で 104%の出荷量増となった。

p. 21 B/S 概要

流動資産は、政策保有株式の売却による現預金の増加を中心に 104 億円増加。こちらの現預金は成長投資に使用する予定であり、増加は一時的なものとご理解いただきたい。

固定資産は、有形固定資産の取得および投資有価証券の時価評価益を中心に 142 億円の増加となった。主要因は、ゼオンケミカルズアジア社の連結追加、高機能樹脂関連の投資。

その結果、総資産は合計で 5,474 億円となり、対前年度比で 245 億円増加。一方で、流動負債は 30 億円、固定負債は 11 億円の増加。以上により、純資産は 203 億円の増加となった。

p. 22 C/F 概要

第 3 四半期は、営業 CF が+364 億円、投資 CF が▲161 億円となり、フリーCF は+204 億円となった。財務 CF は▲77 億円となり、トータル CF は、+126 億円。内訳は資料をご確認いただきたい。

p. 24 2023 年度 事業環境 エラストマー素材

エラストマー素材全体では、10 月 27 日時点における業績予想に対し、増収増益となる見込み。主要因は合成ゴムであり、引き続き需要の堅調を見込む。

ラテックスおよび化成品については、当初緩やかな環境変化を見込んでいたものの、低調な状況が続くものと見込んでいる。

p. 25 **2023 年度 事業環境 高機能材料**

高機能材料事業全体では、10 月 27 日時点における業績予想に対し、減収減益となる見込み。氷見二上工場において能登半島地震の影響により出荷減が見込まれること、また電池材料について、中国電池メーカーを中心に在庫調整が行われるため、当社からの出荷も減少する見込みである。

p. 26 **2023 年度 事業環境 能登半島地震の影響**

当社においては、氷見二上工場を除き通常運転に戻っている。氷見二上工場は各生産ラインを順次復旧中ではあるが、現時点でまだ停止中の生産ラインもある状況。

以上を踏まえ、本日付けで業績予想の修正をさせていただいた。

p. 27 **2023 年度 業績予想**

年間業績予想については、売上高を 3,740 億円、営業利益を 185 億円に修正させていただいた。
なお、その他事業についても売上を下方修正しているが、これは中国を中心とした世界経済の低迷により、商社部門の販売が振るわないため。

p. 28 **2023 年度 配当金予想**

配当金予想は、前回から変更なし。

中期経営計画でお示しした株主還元方針に沿って、中間 20 円、期末 20 円、年間 40 円 とさせていただき、2010 年度から 14 期連続の増配となる見込み。

以上